

---

# 転生先は...ヘタリアの世界!?

翠風

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

転生先は…ヘタリアの世界！？

### 【Nコード】

N2776Y

### 【作者名】

翠風

### 【あらすじ】

交通事故で死んだ少女：時鐘 聖羅。だが、彼女が死んだのはどうやら間違いだったらしい。死後の世界で不思議な光にそう知らされる聖羅。そして光は聖羅を別の世界へ転生させてくれると言った。その後、転生した彼女がいた世界はなんと国が擬人化されたあの世界だった！？しかも、あの兄弟の妹！？ お話は基本アニメ沿い&ほのぼのです。作者は初心者です。また、亀更新になると思います。どうか温かい目で見守り下さい。

## プロローグ？（前書き）

初心者で駄作者の人間の書いた駄作品で良ければ、お読みください。

## プロローグ？

……ここはどこだろう？

気がつくとは私は一人で倒れていた。周りを見渡すと、そこは何もない真っ白な空間だった。取り敢えず、何かないか見るために体を起こしてみる。

私『痛たたた…』

どこかでぶつけたのだろうか？頭がガンガンする。まだはつきりしない頭で何があったのか考える。しばらくして、カチツと頭の中で全てのパズルのピースがはまる音がした。そして私は全てを思い出した。ああ、そうだ私は…

私『私は死んだんだ…』

何も無い空間に少女の澄んだ声だけが虚しく響いていた。

あの日はいつも通りに普通に学校へ行き、普通に家へ帰っていた。>家<と言っても孤児院だが・・・。

10歳の時に交通事故で両親を亡くした私にとって、孤児院は家同然だ。

まあそんなことはさておき、つまりあの日、私はいつもと何ら変わらぬ1日を過ごしていた。

紗弥加「もう本当、テストって嫌だよー。」

琴美「だよー。聖羅はどう思う?」

私「私?私はそうでもないけどな。」

二人「ええー!?!」

私「そんなに驚かなくてもいいじゃん!」

…とまあ、他愛もない話をしながら友達と下校していた。ちなみに、紗弥加と琴美は同じ孤児院で一緒に住んでいる家族だ。

私「あつ、ごめん!私、今日本屋によって帰るから、先帰ってて。」

紗弥加「んー?何買うん?」

琴美「分かった!ヘタリアでしょ!」

私「正解。」

紗弥加「そっか！そういえば聖羅、まだ買ってないんだっただね。」

私「うん。」

琴美「ヘタリアって言ったら、やっぱりツンデレ紳士でしょ。」

聖羅「…イギリスさんのこと?」

琴美「Yes!」

琴美が親指を立てて答える。

紗弥加「何いきなり英語使ってただよ！それにヘタリアと言ったらハンガリー姐さんだろ!!」(ベシッ)」

そんな琴美に紗弥加がささず、ツツコミを入れる。

琴美「痛っ、叩かなくてもいいじゃん!!」

紗弥加「だって、うざかったんだもん」

琴美「うわーん、聖羅ー(泣)」

琴美は半泣きになりながら私に抱きついてきた。

私『えーっと…。よしよし。』

私も琴美の頭を撫でてあげる。

紗弥加「てめっ、私の聖羅に手え出すんじゃないよ。」

そう言うと、紗弥加は琴美を私から引き剥がした。

琴美「ブー。…そういえば聖羅、本屋は？行かないでいいの？」

私『あっ…、そうだった。じゃあ、2人ともまた後で。』

琴美「OK」

紗弥加「了解。」

私『ばいばい。』

二人「バイバイ」

それから私たちは別れた。それが永遠の別れになるとも知らずに…。

私『よかつた、まだ特装版残つてて。』

私は二人と別れた後、すぐに本屋へ行き、ヘタリアの最新刊を買っていた。

私『ん？あの車、やけに速いな…。』

今は、歩行者用の信号は青。車用の信号は赤である。にもかかわらず、向こうから来る車は一向に減速する様子はない。

私（もしかしてあの車、信号無視する気なんじゃ…）

そんなことを考えていると、隣を8歳くらいの女の子が走って行った。車には気付いていないようだ。

私『！？・・・危ない！！』

私は思わず女の子の所へ行き、その子を突き飛ばした。そして私は車に跳ねられた。

私『っ…！！？』



跳ねられた私の体は勢いよく宙を舞う。女の子は無事だろうか？  
そう思い、私はあの子の姿を探す。

いた。…どうやら無事のようだ。

よかつた…  
私

こんな状況なのに、私は安堵の息をつく。私はそのまま道路に叩きつけられた。だが、痛くはなかった。

私（体が麻痺して、感覚まで駄目になったかあ…）

なに冷静に状況を整理してるんだろう、と我ながら呆れる。

私（あゝあ、皆悲しむかな。特に紗弥加と琴美は…）

私は麻痺してうまく動かない腕を何とか動かして、最後に皆へのメッセージを書いた。…もちろん、私の血で。

私『…書け…た…。最後の一字を書くと、私は意識を手放した。

もう動かない少女の手の近くには赤い字ででこご書いてあった。

「ありがとう」

と…。

そして、現在に至る。

私『これからどうすればいいんだろう…』

最初に言ったようにここには何も無い。私の推測が正しければこれは死後の世界というものだろう。ただ…。

私『てつきり神様でも居ると思ってたんだけどな』

誰もいない。

私『……よし。』

なんだか落ち着かないので、歩き回ることにした。もしかしたら誰かに会えるかもしれないし。

私『本当に誰もいない……。』

あれからしばらく歩いてみたが、相変わらず真っ白な空間が広がっている。

私『さすがに気が滅入るよ。』

私はその場に座り込んだ。

??>…す…ない。私『!?!?』

いきなりどこからか声が聞こえた。

私『…一体どこから?』

周りには誰も……。あ、いた。というかあった。

??>…すまない。<

私の目の前には金色に輝く光が浮かんでいた。

光?>すまない。<

確かにその声は、私の目の前に浮かぶ光から聞こえていた。

私『なんで謝っているんですか?』

光がしゃべっていることに驚くも、私は疑問に思いその光に問いかけた。

光?>そなたはまだ死ぬべき人間ではなかったのだ…。<

私『?』

私は光?さんの言っていることが分からず、頭に?を浮かべる。

光?>その…つまり、本来死ぬべき運命にあったのはそなたが助けた子どもで(私『要するに私と私の助けた女の子の運命が入れ替わった…と?』!?!?…そうだ。<

私（なるほど。）

私『で、どうしてあなたが謝るのですか？』

私はまた問いかけた。

光？>それは、本当なら入れ替わった運命もすぐに直せば元に戻せるのだが、私に気が付いた時にはもう遅く、戻せなかったのだ…。本当にすまない。<

少しの間、沈黙が続いた。

私『…いいえ。むしろ、ありがとうございます。』

光？>！??<

光？さんは私の言葉に驚いていたようだが、私は構わずに続けた。

私『逆を言えば、あなたがミスしたお陰で私はあの子を助けられましたですよ？』だったら、私はあなたにお礼を言いたいです。…ミスしてくれてありがとう。』

私は光？に向かって頭を下げた。光？>…そなたは優しいのだな。

<

私『えっ?』

光? > 礼と言ってはなんだが、次そなたが生まれる世界はそなたのよく知っている世界にしてやろう。それと、いくつか特別な力をやるう…。 <

私『どういうことですか? 私の知っている世界って。それに特別な力って?』

光? 「そのうち分かる。」

光? さんがそう言うとな私の体は輝き出した。

私『あのっ、あなたの名前は?』

光? > 我は生と死を管理する者の一人。まあ、人間は天使と呼ぶが。名は…ジユエ <

私『ジユエさん、また会えますか?』

ジユエ > …もし、そなたがどうしても我の力を必要とするなら、その時は手を貸してやろう。 <

私『ありがとっございます。』

ジユエ > では、さらばだ。…聖羅。 <

私『はい？』

ジユエ>頑張れよ。<

私『…はい！』

一瞬、一面が眩しい光に包まれた。次の瞬間にそこにはもう少女の姿はなくなった…

ジユエ>彼女に幸あれ。<

そう言いつとジユエはどこかへと姿を消した。

真っ白な空間はまた元の静けさを取り戻していた。

プロローグ？（後書き）

次は転生してすぐの話です。



## プロローグ？（前書き）

「転生してすぐの聖羅の話です。新しい世界で新しい家族に出会います。」

## プロローグ？

聖羅 side

私『うーん。ここ…どこ？』

今、私は草原（？）らしき場所の、ど真ん中に立っている。気が付いたら、ここにいたのだ。

私『それにしても、このふく…みおぼえがあるようなきが…』

今私が身に付けているものは白い服、白い帽子。そして…。

私『わたし、ちいさくなってるよね？』

そう、私は小さくなっていた。そのせいだろうか？喋りが片言になっってしまう…。

私『みゆ…』

なんか、変な声が出た。ヘタレで有名なあの兄弟みたいだ。そして、気が付いた。

私『くるんがついてる!?!』

しかも、あの兄弟の兄の方と同じ向きだ。

それからしばらく一人でウンウン唸っていると…。

??「おお、こんなところにおったのか!!!」

後ろから突然、声を掛けられた。

私『!?!』

私は反射的に近くにあった大きな岩の後ろへと隠れる。

??「そんなに驚かなくてもいいじゃろ。」

私は恐る恐る顔を岩から出し、その人の顔を見た。

私『!?(…ローマ帝国!?)』

私は驚きながらも、何とかその人に話し掛けた。

私『おじちゃんは大あれ?(まさか、そんなわけないよね?)』

そう思いながら、私は問いかけた。だが…

??「ん?ワシか?ワシの名前はローマ帝国!…お前のおじいちゃんじゃよ。」

私『おじちゃんはわたしのおじいちゃん?』

ローマ帝国「そうじゃよ」

私『……………。』

ローマ帝国「……………」。

しばらく沈黙が続く。

ローマ帝国「あっ、そうじゃー!!(パチンツ)」

私『!?(びくっ)』

いきなりローマ帝国は手を叩いて、大きな声を出した。

ローマ帝国「そういえば、お前の名前を覚えてなかったの?」

私『わたしのなまえ?』

ローマ帝国「そうじゃよ。」

ローマ帝国はニコニコしながら私を抱き上げた。

ローマ帝国「お前の名前は…シチリアーノ。イタリア・シチリアーノじゃ」

私『わたしは…しちりあーの。いたりあ・しちりあーの…。』

ローマ帝国「どうじゃ?気に入ってくれたか?」

ローマ帝国は少し不安げな表情で私を見つめてくる。

私『…うん!きにいったよ。ありがとう!…ろーまおじいちゃん。』

私は笑顔で答えた。

ローマ帝国「そうか！気に入ってくれたか！！そりゃー良かった。」

ローマ帝国…もとい、ローマおじいちゃんも笑顔になった。

ローマ帝国「さてと、そろそろ行くかの？」

ローマおじいちゃんは私を自分の肩に乗せると立ち上がり、どこかへと歩き出した。

私『おじいちゃん、どこにいくの？』

私はおじいちゃんに掴まりながら聞いた。

ローマ帝国「お前さんの兄たちの所へ行くんじゃないよ。」

ローマおじいちゃんは嬉しそうに答えた。

私『わたしっておにいちゃんがいるの？』

ローマ帝国「ああ、二人いるぞ。」

おじいちゃんはやっぱり嬉しそうだ。

ローマ帝国「まず上の兄のイタリア・ローマノは南。そして下の兄のイタリア・ヴェネチアーノは北じゃ。」

私「へへ、そうなんだ。(これはもう「ヘタリア」の世界確定かな…。)」

なんてことを考えながらローマおじいちゃんと話していると、目的地に着いた。

ローマ帝国「おっ、いたいた。おい、お前たち一妹を連れて来たぞ。」

私の視線の先には、ちびたりあとちびローマノがいた。ローマおじいちゃんに下ろしてもらい、私は二人のところへ走った。

私「はじめまして。わたしはイタリア・シチリアーノです。これからよろしくね。」

ちびたりあ「うん、よろしく。ボクはイタリア・ヴェネチアーノだよ。」

ちびローマノ「…イタリア・ローマノ…。よろしくだ、こんにゃろー!。」

まずは自己紹介。名前を知っているとはいえ、初めて会うのでやっぱりちゃんとしなければ。

私「…ねえ、ヴェネチアーノおにいちゃん。」

ちびたりあ「なあに？」

私「ヴェネチアーノおにいちゃんのこと、ヴェニスおにいちゃんってよんでいい？」

ちびたりあ「いいよ。じゃあボクもシチリアーノのこと、シチリアってよんでいい？」

私「うん！」

取り敢えず、ちびたりあとは仲良くなれた。

ちびロマーノ「……。」

そんな様子をちびロマーノは羨ましそうに見ていた。

私（あっ…ちびロマーノがいじけてる。）



私『ロマーノおにいちゃん!!』

ちびロマーノ「!?(びくっ)なっ…なんだこんにやろー。」

私『えへへ…。ロマーノおにいちゃんとわたしのまえがみっておそろいだね〜。』

ちびたりあ「あっ、ほんとだ!いいな〜。」

ちびロマーノ「なっ…、べっ、べっにうれしくなんかねーぞこんにやろー。」

そう言いながらも顔を真っ赤にして嬉しそうなちびロマーノ。

私(良かった。機嫌が直って。)

私『あらためて、これからよろしくね。ヴェニスおにいちゃん!ロマーノおにいちゃん!』

それから三人で遊んだ。

そんな様子をローマ帝国は眩しそうに見つめていた。

私『ローマおにいちゃん!!』

私はおじいちゃんに飛びついた。

ローマ帝国「おっと。。。」

さすがローマ帝国。私を上手く受け止める。

私「おじいちゃんもいっしょにあそぼーよー!!」

ローマ帝国「よし、分かった!じーちゃんが遊んでやるっ。」

それから私たちはたくさん遊んだ。

そして私の新しい生活が始まった。新しい家族と共に…。

## プロローグ？（後書き）

次の話はオリジナルキャラの設定です。

## 設定（前書き）

オリジナルキャラ達の設定です。  
かなり高い確率で、編集し直すと思います…。  
すみませんm( \_ \_ )m。

## 設定

設定

転生前

名前：時鐘 聖羅

誕生日：3月17日

年齢：16歳（早生まれなので高校2年生）

容姿：>しにがみのバラッド。<のモモを黒目、黒髪にした姿。男女どちらからも可愛がられていた。

身長：162.5cm

性格：優しく、真面目。頭が良い。運動神経は中の上くらい。天然で、ものすごく鈍感でもある。少し人見知り。オタクだが、普段は隠している（いわゆる隠れオタク）。ヘタリア大好き。ボカロも大好き。腐ってはいない。

転生後

名前：イタリア・シチリアーノ

国名：イタリア（シチリア半島）

基本、皆からは「シチリア」か「シシリー」と呼ばれている。シ

チリア半島は、イタリアの地図を長靴の形として見たときに、長靴の先端にあたる所。

誕生日：3月17日

容姿：見た目は転生前と同じだが、髪と目は栗色になり、くるんがついた（ロマーノと同じで右）。服もロマーノのと同じ軍服。

身長：162.8cm（少し伸びた）

性格：基本は転生前と変わらない。だが、イタリア化して人見知りが直った。兄たちとは違いヘタレじゃない。むしろしっかりしている。お酒を飲むと、性格が変わる…。キレると怖い。転生してから特殊能力がついた（詳しくは本編で）。

歴史：

前3世紀：ローマ帝国の一部

9世紀初頭：アラブの領土

1130年：シチリア王国（独立）

12世紀末：プロイセン領

1268：フランス領

1282：スペイン王国領

1713：オーストリアに併合

1734：スペイン領

1800年頃：イギリスに支援されて、フランスの勢力圏外

1861：イタリアに復帰

今のシチリア半島：マフィアがいる…。なのでシチリアとロマーノが協力して、どうにかマフィアを無くそうと日々頑張っている。そのためか、シチリアの戦闘能力はかなり高い。最近、石油が発掘さ

れたので石油科学工業進んできている。漁が盛ん。環境はあまり良くないが、オリーブ・オレンジ・レモン・ブドウが広く栽培されている。その為、ワインやオリーブ油が作られる。

名前：桜坂 紗弥加

誕生日：7月21日

年齢：17歳（高校2年生）

容姿：黒目、黒髪純日本人。髪は肩くらい。顔立ちが整っており、美人。

身長：165.3cm

性格：ツツコミ。姉御肌。運動神経抜群。8歳の時に孤児院に来た。オタク。ハンガリーに憧れている。

名前：琴美・K・レクサス

誕生日：9月24日

年齢：17歳（高校2年生）

容姿：瑠璃色の目に、茶髪のハーフ（母は日本人、父はアメリカ人）。髪はロングで、普段はツインテールにしている。

身長：158.7cm

性格：甘えん坊。ボケ。  
6歳の時から孤児院にいる。オタク&微腐。ボケなのに頭が良い。  
ツンデレキャラが大好き。

名前：ジュエ・B・セラフィム

年齢：??（見た目は20歳前半くらい）

容姿：基本は光の姿。たまに人の姿になる。人の姿の時は>テイルズ オブ シンフォニア<のクラトスの姿になる。翼の色は純白。

身長：178・6cm

性格：真面目。ストイック。穏やか。



## 設定（後書き）

次はアニメ第一話であった。世界会議のお話です。

**第一話 世界会議 & I t・会議は踊る! & g t・(前書き)**

アニメ第一話の世界会議です。

第一話 世界会議 &lt;・会議は踊る!&gt;;

シチリアside

アメリカ「よし!これから世界会議を始めろ。世界中の問題をみんなで一っつ解決していこうじゃないか。難しい問題もオレたちが力を合わせれば、きつといい方向に行く!君たちの率直な意見をぜひここで聞かせてくれ。」

私(よく息が続くな...)。

現在私は世界会議に参加している。ちなみに、私の席はローマノお兄ちゃんとヴェニスお兄ちゃんの間だ。

アメリカ「じゃあまずオレからいくぞ。今話題の地球温暖化だけでっかいヒーローをみんなで作って地球をガードしてもらえばOKだと思っんだよ!ちなみに反対意見は認めないぞ。」

日本「私はアメリカさんの意見に賛せ(スイス「またか日本!自分の意見をはつきり言え!!」)

イギリス「俺は反対だ。そんな現実味の無い案受け入れら(フランス「じゃあお兄さんはアメリカとイギリスに反対ってことで」どつちだよ!!!」)

ベシベシッ、ポカポカ バシッ

只今、フランス兄さんはイギリスさんとアメリカさんに叩かれています。

中国「またあるか。お前らいつまで経ってもガキのままじゃねえあるか。少しは大人になるよろし。菓子やるからこれでも食って落ち着けある。」

中国さんが三人を止めようとしませんが…。

イギリス・フランス「それはいらない。」

断られてしまいました。

スペイン「なあ、ロシアは何か意見言わんの？なんかあいつら言いたってやれや。」

ロシア「え？僕？僕は…リトアニアが困って困って僕に泣いて懇願する姿が見たいな。」

リトアニア「……………。(ガタガタ)」

ロシア「ラトビアだってそう思うよね？」

ラトビア「……………」。(ガクガクガクガクガク)

私(ロシアさん……。ラトビア君、ものすごく怯えています。ベラルーシさんも脅さないで下さい。)

二人を止めようと思ひ私は口を開こうとした。でも……。

エストニア「ロシアさん。弱い者いじめは良くありませんよ。」

エストニアさんに先を越されてしまった。

ロシア「わ〜。君それすごくムカつくよ〜」

ポーランド「そこまでだしー。これ以上近よると、ポーランドルール発動でお前の首都がワルシャワになるしー。」

ポーランド君はリトアニアさんの前に立ち、ロシアにさんにそう宣言していた。

私(ポーランド君はリトアニアさんと本当に仲がいいな〜。)

ワーワーギヤーギヤーワーワーギヤーワーワーザワザワゲシバタバ  
タドオーン

ドイツさんがふるふるしてきました。しかし、騒ぎが収まる気配  
は全くありません。

私（まずいかも…。）

私『ねえ、ロマーノお兄ちゃん。』

ロマーノ「？何だ？」

私『耳ふさいでた方が良くいかも。』

ロマーノ「は？」

私『私の予想では、もうすぐドイツさんの堪忍袋の緒が切れると思  
うんだ。』

ロマーノお兄ちゃんは一瞬、何を言っているんだ？という顔をし  
たが、少しして私の言った言葉の意味が分かったように「ああ。」  
と言って耳をふさいだ。

イタリア「ヴェ〜？なんで兄ちゃん耳ふさいでるの？」

ロマーノお兄ちゃんが耳をふさいだのを不思議に思ったヴェニスお兄ちゃんが話し掛けてきた。

私「ヴェニスお兄ちゃんも耳ふさいでた方がいいよ。」

イタリア「ヴェ？なんでなんで？」

私「すぐに分かるよ。」

イタリア「???分かった。」

そう言つと、ヴェニスお兄ちゃんも耳をふさいだ。そして私も。

私（ドイツさんが怒鳴るまであと…3、2、1、0）

ドイツ「お前ら黙れ!!」

まるで私のカウントダウンが聞こえてたかのように、丁度いいタイミングでドイツさんが怒鳴り出した。耳をふさいではいたが、私たち3人は共にびくっ、となつてしまった。

私「はは…。さすがドイツさん。耳をふさいでたにもかわらず」の迫力。見習いたいな…。」

イタリア「ヴェー!?ダメだよシチリア!ドイツみたいになっちゃや  
だ!。(泣)」

ロマーノ「そうだぞ!あんなジャガイモ野郎を見習うんじゃね!。

(怒)」

お兄ちゃんたちは二人共慌て出した。

私「わ、分かったから二人共落ち着いて。ドイツさんの話聞こう?  
ね?」

イタリア「...うん。」

ロマーノ「ちっ、...ああ。」

ドイツ「...意見したいやつは明確なデータを最初に提示しろ!  
話はそれからだ!一人持ち時間は8分厳守!時間切れも私語も一切  
認めん!さあ、最初に発言するやつは覚悟を決めてから手を挙げる  
ように。」

ふわふわ

私は隣...ヴェニスお兄ちゃんが手を挙げる気配を感じた。



ドイツ」では発言を許可する。…イタリア!」!

イタリア」……パスタ~~~~~」

**第一話 世界会議 & I t ・ 会議は踊る！ & g t ・、（後書き）**

次はWW？でイタリアとドイツが会おうお話です。

第二話 WW? く全てはここから始まった? (前書き)

イタリアとドイツが出会います。  
シチリアの出番が少ないです…。

第二話 WW? (全てはここから始まった?)

ドイツside

時はWW?

俺はかのローマ帝国の孫、イタリアの国境を越えていた。だが:

俺「…おかしい。」

俺の手の中にあるのは銃…ではなく、

俺「木の棒一本で楽々国境を越えてしまったぞ…。」

そう、ただの木の棒であった。

俺「まさかこんなヴルストを食う余裕がある国境越えは初めてだ。敵を見かけてもそそくさと何処かへ行ってしまうし…。これは夢か? いや、しかし油断はできません。やつのことだ、きつと策を練ってあるに違いない。」

俺は周りを警戒しながら森をずんずん進んでいった。

俺「ん？」

場所は変わってシチリア半島

シチリア『ふう、やっと2/3が終わった。』

シチリアの机の上には書類の山が二つできていた。

シチリア『ヴェニスお兄ちゃん大丈夫かな…。まさか、ドイツさんに見つかって「ボクはトマト箱の妖精だよ。」なんて言っていないよね?』

イタリアの森の中

俺「ふむ、なぜこんなところにトマト箱が?」

俺は箱を木の棒で叩いてみた。

??「うわっ!?!」

俺「!?!?うわっ?」

??「や、やあ!ボクはトマト箱の妖精だよ!

き、君と友達になりに来たんだ!!!一緒に遊ぼう!!!」

シチリア半島

シチリア『うん、そんな訳ないよね さてと、早くこの仕事を片付けなきゃ。』

そう言つと、シチリアは残りの書類へと手を伸ばすのだった。

イタリアの森の中

イタリア「うわあー!ごめんなさい!ごめんなさい。オレ、トマト箱の妖精なんかじゃないんですー!!!」(泣)

俺「!?!?!!?!?」

俺が無理やり箱を開けると、中から茶髪の優男が泣きながら謝ってきた。

イタリア「マジで撃つのは勘弁してください！何でもするから撃たないでー（泣。  
何でもするから…何でもするからー！！」

シチリア半島

シチリア『ん？今、ヴェニスお兄ちゃんの泣き声が聞こえた気が…。  
気のせい…だよね？』

イタリアの森の中

俺（いやまさか、いくら何でもこれはないよなーこれは。でもだつたらこいつは一体何なんだ？）

俺は泣きながら謝っている優男を片手で持ち、ぶら下げていた。

俺「…1つ質問がある。お前は本当にローマの子孫というやつか？」

それまでずっと「ごめんなさい」や「パスタ」を繰り返して泣いていたイタリアが泣き止んだ。

イタリア「えっ、ローマじいちゃん知ってるの？オレはローマじいちゃんの孫だよ。パスタとピッツアが大好きなお茶目さんです。」

それから優男…もといイタリアは笑顔になった。

イタリア「何だお前怖い人かと思ったじゃないか。話せるじゃんか。」

イタリアはさっきまで泣いていたのが嘘のようにニコニコとした。  
俺は呆れて、警戒を解きかけた。が…

俺「ハッ!？」

すぐに思い直し奴から離れた。

俺（そうか!？これは罠か!害の無さそうな顔をして隙をつくつもりなんだ…。なんて奴だ!!)



イタリア「お前とは友達になれ（ペコッ）」

俺は持っていた銃のストックをイタリアの頬に押し付けた。

俺「俺は騙されんぞ！くたばれ pasta 野郎！」

イタリア「ぎゃああえあああー！！」

このとき俺は

この出会いが

自分の運命を

こんなにまで

変えるとは

思っていなかった…。

第二話 WW? く全てはここから始まった? (後書き)

感想書いて下さると、嬉しいです。

次は、日独伊三国同盟の出前まで書く予定です。

### 第三話 WW? くドイツと捕虜のイタリアく(前書き)

タイトル通り、捕虜になったイタリアの話です。終わり方が微妙です。すみません…。

### 第三話 WW? ～ドイツと捕虜のイタリア～

それからドイツはイタリアを捕虜にした…のだが…

ドイツ「お前逃げ出す気はないのか？」

イタリア「何で？だってここご飯出るし戦わなくていいし、俺こ  
こ好きだ〜。」

ドイツ「ダメだ！！兵ならばたとえ槍や火やフランス人が飛び交う  
中でも、逃げ出そうと懸命な努力をするものだ。おい、聞いているの  
か！？寝るな！お前を見張る身にもなれ！暇すぎるんだ！！」

ドイツが説教をしている中で、イタリアはぐで〜、となつて寝て  
いた。

ドイツ「ほら、見てみる〜。牢屋のドアが開いてるぞ？逃げ出さな  
くていいのか〜？」

ドイツは牢屋のドアを【わざと】開けた。

す〜（イタリアが起き上がる音）

ゆらゆら〜（イタリアが外に出る音）

へちゅくちゅへちゅくちゅへちゅくちゅへちゅくちゅへちゅくちゅへちゅくちゅ

へらへら〜へらへら〜（イタリアが牢屋に戻って来る音）

数日後…

ドイツの部下「ドイツさん、お届けものです。」

ドイツ「ん？俺にか？特に心当たりはないのだが…。」

ドイツは部下の言葉を聞き、眉をひそめる。

ドイツの部下「はい。あなたと…イタリア宛てです。」

ドイツ「何!?!」

イタリア「ヴェ？俺宛て？」

イタリアは現在、ドイツの捕虜である。そのイタリア宛ての荷物ならば、何か危険なものが入っている可能性が高い。

ドイツ「それで…誰から送られてきたものなんだ？その荷物は？」

ドイツは警戒しながら部下に聞いた。

ドイツの部下「えっと、ちょっと待って下さい。…届け主は「シチリアーノ」と書いてあります。」

イタリア「わーい シチリアからだ。」

イタリアはドイツの部下からさっさと荷物を受け取り、開封した。

ドイツ「!? 貴様! 何をしている!？」

ドイツはすぐにイタリアから荷物を取り上げ、中身を見た。

ドイツ「!? ……なんだ? これは…?」

イタリア宛ての荷物の中には…

- ・パスタ
- ・サッカーボール
- ・ワイン
- ・トマト
- ・オリーブ油 など

と手紙が入っていた。

ドイツは手紙を手に取り、読んだ。

ドイツ「えー、なにになに…」

> ヴェニスお兄ちゃんへ

お元気ですか? 私は元気です。この前会ったときに頼まれたボールやパスタを送ります。早く帰って来てね。あんまりドイツさんに

迷惑かけちゃダメだよ。  
シチリアーノよりく

…この前？」

イタリア「やったー。パスタパスタ トマトトマト」

イタリアはドイツが手紙を読んでいる間に、荷物を取り戻していた。

ドイツ「…おい。」

イタリア「はあひ（なあに）？」

イタリアは早速、送られてきたトマトを食べていた。

ドイツ「>この前会ったときとはどういうことだ？」

イタリア「（モグモグ、ごくん！）うん、この前ドイツが俺を外に出してくれた時に会ったんだよ。俺のこと助けに来てくれたみたいだったけど、ここ居心地がいいからこのまま残る、と言って帰ってもらったんだ。」

ドイツ「何だと！？…というかそれなら普通、一緒に逃げるだろ！」



イタリア「だって俺ここ好きだもん」

ドイツの突っ込みに、イタリアはニコニコと笑いながら答えた。

ドイツの部下「あ…お取り込み中のところすみませんが、ドイツさん宛ての箱はどうしましょうか？」

ドイツ「ああ…待たせてすまなかったな。そうだな、取り敢えず受け取っておく。」

ドイツは部下から箱を受け取った。

ドイツの部下「では、失礼しました」(ビシッ)

ドイツ「つむ。(ゴシッ)」

ドイツとドイツの部下はお互いに敬礼を交わした。そして、ドイツの部下は牢屋をあとにした。

ドイツ「ふむ、どうしたものか…。」

ドイツは腕をくみ目の前の箱を見つめた。

ドイツ（やはり危険物の可能性があるから開けずに捨てるべきなのか？いや、でも危険物ならそれはそれでどうにかしなければいけない…。）

ドイツ「…よし。」

ドイツは箱を開ける決意をした。

ベリベリッ　パカッ

ドイツ「！？…これは！？」

箱の中には

- ・胃薬
- ・頭痛薬
- ・古びた短剣
- ・手紙

があつた。

ドイツはまた手紙を手に取り、読んだ。

ドイツ「また手紙か…。なにになに…」

>ドイツさんへ

兄がお世話になっております。ドイツさんは真面目な方だと聞いたので、兄のことで色々と苦労していると思い、頭痛薬と胃薬を送りました。あと、短剣は私達の祖父である「ローマ帝国」<が使っていた物です。ドイツさんは祖父を尊敬していると耳にしたので同封しました。良かったらどうぞ。兄を宜しく願います。  
シチリアーノより<

>ローマ帝国が使っていた短剣くだと!?!これが…。」

ドイツは古びた短剣を手に取り、じつくりと眺めた。刃渡りは約15cm。古びてはいるが、きちんと手入れされていたのだろう。刃は欠けておらず、切れ味は良さそうだ。

イタリア「あつ!それローマじいちゃんのだ。」

さっきまでトマトを食べていたイタリアがドイツの持っている短剣を指さして言った。

ドイツ「何!?!(ということとはこれは本当にローマ帝国の…。)」

ドイツは改めて短剣をじっと見つめる。

イタリア「あつ、そうだ!ねえドイツ、一緒にサッカーしようよ!せっかくシチリアが送ってきてくれたんだし。俺、今暇なんだ<。ドイツも暇でしょ?やろうよサッカー!ねえねえドイツ?やろうや

るう  
「

ドイツ」お前は…。」

ドイツは下を向き、ふるふると震えだす。

ドイツ」少しは自分の立場を考慮ろ—————!!」

数日後ドイツは薬を送ってくれたシチリアに感謝するのだった。

**第三話 WW? くドイツと捕虜のイタリアく(後書き)**

感想やポイントもらえると嬉しいです。

次までWW?の話の予定です。

第四話 WW? くイタリアの帰宅(?)く(前書き)

すみません…

この話でWW?の話が終わらせるつもりだったんですが、できませんでした…。

#### 第四話 WW? イタリアの帰宅(?)

シチリア side

私「ヴェニスお兄ちゃん…元気かなあ？」

私は机に向かい、書類から一旦目を離して呟いた。  
現在ヴェニスお兄ちゃんはドイツさんの捕虜になっている。

先日、私はヴェニスお兄ちゃんを迎えにドイツさんの家へ行き、偶然にも会うことができた。でもヴェニスお兄ちゃんは「ドイツの家は居心地がいいからこのまま残る。」と言い、私はヴェニスお兄ちゃんから欲しい物を聞いたあと家へと帰ったのだった。

もちろん私はヴェニスお兄ちゃんに帰って来て欲しかったが、そうするとまたヴェニスお兄ちゃんが危ない目に遭うかもしれないと思い、しぶしぶ家へと帰ったのだ。

私「会いたいなあ…。」

コンコン…

誰かが私の部屋の扉をノックした。

私『どうぞ。』

ガチャッ

シチリアの部下「失礼します。」

部屋に入って来たのは私の部下だった。

シチリアの部下「シチリアさんに連絡です。」

私『なあに?』

シチリアの部下「あなたの兄…イタリア・ヴェネチアーノが帰って来ましたよ。」

私『!?本当!?!』

私は机から身を乗り出して聞いた。

シチリアの部下「ええ。何でもドイツから箱に入れられて送られて来たらしいです。あと、変な歌を歌ってたらしいですよ。」

私『へ、へえ〜。( )「ドイツ〜ドイツ〜ドイツはいいところだよ〜

」っていうあの歌かな?』



私はあの歌を思い出し、思わず笑いそうになるのを必死で抑えた。

シチリアの部下「今、下に居ると思うので会いに行ったらどうですか？」

私「そうだね。ちょうど仕事も一段落ついたところだし会いに行こうかな。」

シチリアの部下「では、こちらの書類は提出しておきますね。」

私「うん、ありがとう。お願いね。」

シチリアの部下「／＼／＼かしまりました。」

私「？顔、赤いよ？大丈夫？熱はない？」

シチリアの部下「だ、大丈夫です。」

私「そう？ちょっと待ってて。」

私は机の引き出しから風邪薬と解熱剤を取り出した。

私「はい。これ、具合が悪くなったら飲んでね。」

私は薬を部下に渡した。

シチリアの部下「ありがとうございます。」

彼は私から薬を受け取り、ポケットにしまった。

シチリア『じゃあ、書類お願いしてもいいかな？』

シチリアの部下「はい。」

シチリア『よろしくね。』

そう言って、私は部屋をあとにした。

階段を降りると、ギャーギャーと騒ぐ声が聞こえてきた。

ローマーノ「……だいたいお前は何でシチリアーノが迎えに行った時に一緒に帰って来なかったんだよ！」

イタリア「ヴェ…だってドイツの家、居心地が良かったんだ。だから…」

ロマーノ「こっちはお前が居ないせいで仕事が増えて大変だったんだぞ！」

イタリア「え！？兄ちゃんが仕事？」

私「さすがに私一人じゃ無理そうだったから、手伝ってもらったんだよ。」

イタリア「！？シチリア！！」

私「お帰り、ヴェニスお兄ちゃん。」

私が笑いかけると、私の突然の登場に驚いた顔をしていたヴェニスお兄ちゃんも笑顔になった。

イタリア「うん！ただいま。あつ、そうだ！」

私「？」

イタリア「ただいまのハグ」

そう言つと、ヴェニスお兄ちゃんは私にハグをしてきた。

私『みゆ！？』

私は驚いて、思わず奇声を発してしまった。

ロマーノ「おい、シチリアーノのから離れる！驚いて固まってんだろ。」

私『……………。』

いきなりのことに私は固まってしまっていた。

イタリア「だってシチリア可愛いんだもん 兄ちゃんもそう思わない？」

ロマーノ「……………まあ…な。」

私『（ハッ）そんなこと無いよ？あの、ヴェニスお兄ちゃんそろそろいいかな？』

イタリア「ヴェ〜……………」

ヴェニスお兄ちゃんは少し名残惜しそうに私から離れてくれた。

私『ありがとう。…はあ、私もそろそろ慣れないといけないな。ハ

グに。』

イタリア「シチリア、ハグがくるのを分かってたら平気なのに、いきなりだと固まっちゃうもんね。」

ロマーノ「あと、知らないヤツとのハグもな。」

私「うん。…でも、昔はハグ自体苦手だったからマシになった方だと思っよ。』

イタリア・ロマーノ「そうだね〜/だな。」

昔は本当にハグが苦手で、異性からハグをされるといつも奇声を挙げたり、泣いたりしてしまっていた。そして、ひどいときは相手を突き飛ばしていた。そのうちの7割以上はフランス兄さんだった気がする…。

私「それにしても…。』

イタリア・ロマーノ「？」

私はお兄ちゃん達の顔を交互に見た。

私「こうして3人揃うのって久しぶりだね。』

私と言うと、お兄ちゃん達はお互いに顔を見合わせた。

イタリア「うん。」

ロマーノ「かもな…。」

最近は私とロマーノお兄ちゃんは別々に仕事、ヴェニスお兄ちゃんはドイツさんの捕虜、で兄妹で集まれる機会がなかった。

私「せっかく久しぶりに3人揃ったんだし、みんなでご飯作ろうよ！」

イタリア「わ、それいいアイデアだと思うよ！ね、兄ちゃん。」

ロマーノ「…悪くはない。」

シチリア「じゃあ、決まりだね。」

イタリア「パスタ作ろうよ！パスタ！！」

ロマーノ「トマト料理は絶対に外せねえな。」

お兄ちゃん達はそれぞれ自分の好きな料理を希望してきた。

私「なら…ボロネーゼなんてどうかな？」

ロマーノ「いいぞ。」

イタリア「シチリアは何が食べたい？」

私「私？私は…カッサータが食べたいな。」

カッサータとは…シチリア地方のお菓子のことです。チーズに砂糖漬けの果物などを加えたクリームと、スポンジ・ケーキで作ります。アイスクリームに仕立てたものもあります。

イタリア「それじゃあ、デザートにカッサータを作るっか。」

私「うん。」

ロマーノ「…で、材料は揃ってんのか？」

イタリア・私「あつ…。」

ロマーノ「ったく…。俺が買ってきてやるからその間にお前達は準備してる。」

イタリア「はい。」

私「ありがとう、ロマーノお兄ちゃん。」

ロマーノ「ふん…。」

それから、ロマーノお兄ちゃんは材料を買いに行き、私達は準備をした。

お兄ちゃんは1時間程で帰って来た。

私『お帰り、ロマーノお兄ちゃん。』

ロマーノ「ああ、ただいま。…？おい、ヴェネチアーノはどうした？」

私『えーと…ヴェニスお兄ちゃんはその…準備が終わったから、シエスタを…。』

ロマーノ「はあ！？…この、ふざけやがって！あのバカ弟ー！ー！！」

私『え！？ちよつ、ロマーノお兄ちゃん！？』

その後、ヴェニスお兄ちゃんはロマーノお兄ちゃんにこつてり絞られたのだった。

でも、そのやり取りもまた久しぶりで、面白かった。

夜は計画通り3人で夜ご飯を作った。

ご飯を食べる時にヴェニスお兄ちゃんは、ドイツさんの家に居た時のことを話してくれた。お兄ちゃんの話によると、ドイツさんはおじいちゃんの短剣を喜んでくれてたらしい。良かった。

私『今日は本当に楽しかったなあ〜。』

私は食器を洗いながら呟いた。



私（私の記憶が正しいなら、ヴェニスお兄ちゃんはまだドイツさんの家に行っちゃうんだろうな…今度は出稼ぎに。）

そう思うと何だか少し悲しくなり、小さく俯いてしまった。

私<sup>でも</sup>…

私は顔を上げ、小さく微笑んだ。

私（その時は帰って来たときのために、材料を買っておこうかな）

私は一人で勝手に新たな計画を立てるのだった。

第四話 WW? イタリアの帰宅(?) (後書き)

次こそWW?を終わらせませす!

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2776y/>

---

転生先は...ヘタリアの世界!?

2011年11月22日04時05分発行